

嘉穂郡穎田町におけるトゲミノキツネノボタンの発生実態

福島裕助・*小林修司・真鍋尚義 (福岡県農業総合試験場・*嘉穂農業改良普及所)

Yusuke FUKUSHIMA, Shuji KOBAYASHI and Hisayoshi MANABE : Study on Occurrence of Spiny Fruited Crownfoot in Kaida-machi, Kaho-gun

森田ら¹⁾が1989年に報告した新しい帰化雑草の一つであるトゲミノキツネノボタン (*Ranunculus muricatus* L.) の発生面積が、福岡県内の穎田町及び小郡市の水田裏作麦圃場において増加しつつある。穎田町における発生面積は7haに及んでおり、現地では防除法の確立が迫られている。そこで、著者らは1989年4月に、発生地域の穎田町の農家にアンケートを依頼し、実態調査を行い、いくつかの知見を得たのでその概要を報告する。

1. 試験方法

福岡県嘉穂郡穎田町で、トゲミノキツネノボタンが発生している圃場を有する農家14戸のうち、特に発生の多い6戸の農家を対象に、発生圃場の条件や伝播経路などについてアンケート調査を行うとともに発生・生育経過の追跡調査を実施した。

2. 結果及び考察

1) トゲミノキツネノボタンの発生・生育経過

写真1は、双葉展開期(1月下旬)のトゲミノキツネノボタンである。本雑草の発生始期は、11月中下旬播の麦圃場においては12月中下旬で、1月下旬に双葉展開期となり、2月中旬には本葉が1葉程度となった。その後の生育進度は早く、3月上旬には4~5葉となり、4月



写真1 双葉展開期 (1月下旬)



写真2 成植物の花と集合果

中・下旬には開花期となり、草丈が30cm程度になった(写真2)。成熟期は6月上旬で、小麦とはほぼ同時期であった。多発生田では雑草害による減収はいうまでもなく、コンバイン収穫の障害となり、さらに、大きくて重い種子は小麦と選別しにくく、検査等級をおとすことが推定された。

2) 地域内における伝播経路(第1図)

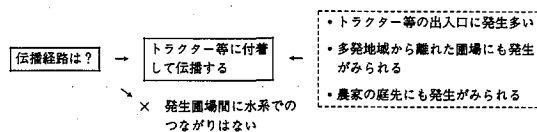
トゲミノキツネノボタンの地域伝播経路については、トラクター等の出入口に発生が多いことや、多発地域から比較的離れた同一農家所有の圃場にも発生がみられること、また、農家の庭先にも発生がみられることなどから、入排水等の水系での伝播よりむしろ耕うん・代かき時にトラクター等に付着して伝播する経路が主であると考えられた。

3) 圃場条件とトゲミノキツネノボタンの多少(第2図)

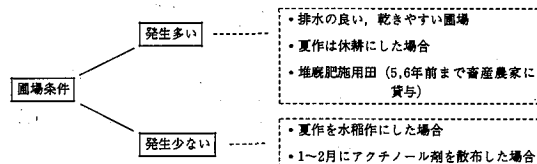
排水が良く、乾きやすい圃場や夏作を休耕した圃場、堆肥施用田等ではトゲミノキツネノボタンの発生が多かった。これらの圃場は5、6年前までの数年間、畜産農家に貸与された圃場であり、本雑草の発生が貸与期間の後に観察されるようになったことは、本雑草の調査対象地域への来歴が、外国産の家畜飼料に混入して帰化する多くの外来性雑草の来歴と同様の経路をたどったことを示唆するものである。また、夏作を休耕した場合より、水稲作にした場合には発生が少なく、本雑草生育初期の1~2月にアクチノール剤散布が行われた圃場では発生が少なかった。本雑草の防除法については検討中であるが、多発生田では、本雑草の双葉展開期から本葉1葉期ころまでにアクチノール剤を散布することや、土入れ作業を行うことが、現時点である程度有効と判断された。

引用文献

- 1) 森田弘彦ら：雑草研究 34別号, 47-48, 1989.



第1図 穎田町におけるトゲミノキツネノボタンの伝播経路



第2図 圃場条件とトゲミノキツネノボタンの多少